

全国初の裁判員裁判

8月3日～6日

これでよかったの？

そのうち自殺者も……？



裁判員男性が胸中を激白！

「判決前日は酒を飲んで泣いた」

「裁判員制度は知らない／大運動」の呼びかけ人4名は、7日、緊急記者会見を開いた

初裁判員裁判の判決翌日。市民団体『裁判員制度は知らない／大運動』は、「市民参加という名の刑事裁判シヨード」だと切り捨てた。評議の中心は、一切明らかにならず、裁判員は守秘義務を一生懸命に守る。『貴重体験でしつと語る裁判員』もいたが、判決を決めるという最も重要な部分の、裁判官と市民のやりとりが明かされない。どこに市民感覚が生かされたのか、見極めが難しい。裁判員は、裁判官の雰囲気作りを一様にほめた。『見なくてもいいですよ』という指示も出ていたという。

「結論を出すうえで、リアルに見てもらわなければ困るわけですよ。見たくなければ見なくてもいいですよ、ではすみません。そういう裁判官を『親切だ』と裁判員は思っている。だからすごい負担だと思っていれば、意外にそうじゃないかな。でも結局、懲役15年という判決を下したこと、これから心の奥底に響いてくると思いますよ」裁判官でも「あの判決でよかったのか」と振り返ることがあるという。同じ重荷を裁判員も背負うことになる。

「貴重な体験ではすまない日が

弁護士の高山俊吉氏は、疑問をはさむ。

「結論を出すうえで、リアルに見てもらわなければ困るわけですよ。見たくなければ見なくてもいいですよ、ではすみません。そういう裁判官を『親切だ』と裁判員は思っている。だからすごい負担だと思っていれば、意外にそうじゃないかな。でも結局、懲役15年という判決を下したこと、これから心の奥底に響いてくると思いますよ」裁判官でも「あの判決でよかったのか」と振り返ることがあるという。同じ重荷を裁判員も背負うことになる。

近い。

裁判員を守るべき工夫もこれといってなく、ほとんどノーガードに近かった。全国紙記者の話。

「裁判員が裁判所近くに来た途端に、カメラマンが一斉にフラッシュをたく。一般の人に、誰が裁判員か教えるようなものです。裁判員の身辺を調べていたり、張り込んだメディアもあったとか」

いざ制度が定着すれば、そのような興味本位も薄れるだろうが、始まったばかりだ。とはいえ問題を内包しつつ、4日間の審理は無事……。

東京都足立区の隣人殺害事件。国民代表が下した判決は懲役15年——。そもそも裁判員は必要だったのだろうか？

「はつきりいって、つらい部分を感じております」と、女性会社員（50）は振り返り、「心の負担をどう表現していいかわからないのですが、気持ち揺れて大変でした」と女性ピアノ教師（51）は目に見えない重圧を感じ、また、「やはり、ひとりの人の自由を奪ってしまう重大な決断。被告の人も生きていくわけで、そういう形で判断しなければならぬ。何が正解かわかりません。最後は自分自身の考え方でやるしかない」という不安感が大きかった。それは言葉で慎重に選びとった。国民注視のもと、8月3日から6日までの4日間、東京地裁で行われた初めての裁判員裁判。重責を果たした裁判員たちは審理を振り返り、冒頭のように打ち明けた。対象となったのは、今年5月1日に東京都足立区で起きた殺人事件。無職の藤井勝吉被告（72）が、長年にわたりがみ合っていた自宅の斜め向かいに住む女性（当時66）を、口論の末にサバイバルナイフで刺殺した一件だ。罪状認否で被告は殺害事実を認め、争点は殺意の内容（強さ）に絞られた。

1日目の初公判には58席の傍聴券をめぐり、2382人が並んだ。裁判員の選任手続きに始まり、冒頭陳述と証人尋問、そして初日は終了した。2日目は証人尋問と被告人質問。3日目は被告人質問、被害者の次男の意見陳述、検察側の論告求刑、遺族側の意見陳述、弁護側の最終弁論、被告の最終意見陳述を経て、結審。審理は終わりに、裁判員が評議へ入った。

4日目、判決。懲役15年の審判を下した裁判員は、終了後、司法記者クラブで会見した。男性3人、女性4人。そのうち5人が撮影にも応じたが、全員が匿名を希望した。

人を裁くという初めての経験。アルバイト男性は、判決前後を回想し、「1人でお酒を飲みながら、判決を出すうえでいろいろなことを考えました。被告、被害者のことを考えていると非常に無常観、世の中の不条理を感じました。すごく涙腺がもろくなって、泣きました」と、しみじみ。

7人の裁判員（補充裁判員も含む）は、それぞれ思いや苦労を吐露する一方、「みんなで成し遂げた」（38歳の契約社員女性）という充実感もにじみせた。

当初から裁判員制度の導入に反対し、裁判や記者会見の様子などを冷やかに見ていた作家の雨宮処凛さんは、「今回、初めて（裁判員に）

泣いた……」

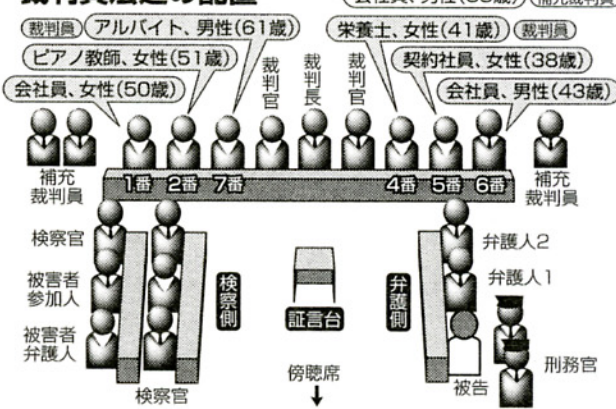


選ばれてしまった人たちについては、本当にかわいそうだと思います」

そう同情を示したうえで、制度の今後の行方を気にする。「世間からのバッシングがすごいと思います。今回の見ても発言内容、表情などの情報が出すぎています。精神的負担を考慮して、（選ばれても）辞退を考えたほうがいいと思いますね。（複雑な裁判の場合は）報道に傷ついたり、判決へのプレッシャーなどで自殺する方も出るかもしれない。死刑判決を下す場合は一生、罪の意識にさいなまれるかもしれない。2度と訂正できない判決を背負わせるのは重すぎます。判決は一生ついて回ります。ずっと悩み続けると思う」

「ニュースでも今日も質問なし」というのを見ました。質問の理解が精いっぱい、私は頭がそこまで回りませんでした」と批判を受け止めていたが、裁判官でも一審と二審で判断が分かれるケースもある。そのようなときに裁判員に選ばれば、受け止めやすい批判ばかりとは限らない。初公判から判決まで、すべてを傍聴した30代男性も、裁判員の態度に不満をもらす。「裁判員の方たちが緊張して、1日目、2日目の公判

裁判員法廷の配置



今回の裁判員裁判でも、傍聴した一般市民から手厳しい批判が飛び出した。批判はメディアに流れ、裁判員の当事者がそれを目にする。「せっかく一般の方がいらっしやるんだから、臆することなくもっと聞けばいいと思いましたが」と2日目の裁判を傍聴した50代の主婦。「質問がなかった」という不満の声は、多くのメディアでも報じられた。裁判員の栄養士女性（41）は、「ニュースでも今日も質問なし」というのを見ました。質問の理解が精いっぱい、私は頭がそこまで回りませんでした」と批判を受け止めていたが、裁判官でも一審と二審で判断が分かれるケースもある。そのようなときに裁判員に選ばれば、受け止めやすい批判ばかりとは限らない。初公判から判決まで、すべてを傍聴した30代男性も、裁判員の態度に不満をもらす。「裁判員の方たちが緊張して、1日目、2日目の公判